

令和2・3年度国立劇場《歌舞伎脚本募集》選考の経過

今回は95篇の応募作品が寄せられた。応募者数は86名で、男性が42名、女性が44名であった。世代別でみると、10代から80代まで幅広い応募があったが、50代の応募が全体の4割近くを占め、60代、40代、70代の応募が続いた。また、初めての応募作は全体の6割近く（56篇）あった。

前回（平成29・30年度）の募集から、規定枚数を400字詰め原稿用紙換算・60枚以内（下限なし）に変更し、約1時間から1時間30分の間で上演できる密度の高い作品が期待されている。

今回の応募作品は、従前と同じく歴史劇、世話物、翻案、幻想的作品など様々な種類にわたり、着想に面白さや新鮮さがあるものが少なからずあった。しかし、多くの場合、創作の出発点にある思いつきを発展させてひとつの作品へと仕上げる、しっかりした構成力、表現力に欠けていた。或いは、ユニークな着想を、手練れた手法によってまとめたのみの、既存の技法に終始した作品に留まるという場合もあった。これらのことから、着想のユニークさ、それを生かす構成力、表現力の揃った作品の応募が強く望まれる。

また、日本語の誤用、不適切な使用が散見された。ら抜き言葉などの基本的に誤った用法は、第一に留意すべきである。また、わかりやすさは求められるとしても、現代に特有な言葉遣いにも留意が必要である。

選考会の対象作品は、3次にわたる予備選考を経て、下記の7篇が選ばれ、最終選考会にかけられた。

[選考対象作品] (受付順)

『隅田川恋封印 (すみだがわこいのふういん)』	羽根 和良
『かざしの姫君 (かざしのひめぎみ)』	ササキ タツオ
『最後のぶざま (さいごのぶざま)』	青砥 啓
『春来甘辛田楽味 (はるきたるあまからでんがく)』	山崎 赤絵
『とある破戒僧 (とあるはかいそう)』	月島 實
『陣中花在 (じんちゅうはなあり)』	浜田 耕平
『慶長天主信仰記 (けいちょうばてれんしんこうき)』	安樂井 薫

選考会は1月13日に行われ、大笹吉雄・岡崎哲也・竹田真砂子・西川信廣の各氏と独立行政法人日本芸術文化振興会理事長・河村潤子の五名の選考委員が、上記の7篇について討議を行った(書面による講評を提出し、選考会終了後討議の内容について確認を得ることで、出席に替えた委員を含む)。

各作品の講評に続き、『最後のぶざま』『陣中花在』『春来甘辛田楽味』の順で、授賞候補になりうるとの結論に達し、討議に入った。討議の結果、この3作については、いずれも題

材の選択、趣向や場面の設定等で評価できる点があるとされたが、台詞や構成等に問題があり、舞台化できるほどの内容には至らず、優秀作の水準には達していないとの意見の一致をみた。再度討議し、全委員の一致により優秀作については該当なしとされ、『最後のぶざま』『陣中花在』『春来甘辛田楽味』の3作を佳作に選出した。

将来を期待・嘱望される応募者に対して贈られる奨励賞には、台詞、構成等が入選のレベルには達していないが、素材がおもしろく、着想が良いとの評を得た『かざしの姫君』の作者が選ばれた。

なお、最終選考の対象となった作品全般について付言すると、外題をつけるに際して、外題の呼び起こすイメージと作品内容との関連を、さらによく考えることが望まれる。

入選作の概要と講評は、次の通りである。

『最後のぶざま』

〔概要〕

この作品は、明治五年に起きた疑獄事件「山城屋事件」を題材に採る。長州藩「奇兵隊」出身の商人・山城屋和助を主人公に、山縣有朋、フランス人女性セリーヌ等を絡め、明治という新時代に「武士」の誇りを持った男が破局に追い込まれて行く姿が描かれる。

舞台は、幕末の小倉口の戦い、ベルサイユ宮殿、陸軍省応接室の三場である。勇ましい青年武士であった和助が、明治維新を経て、外国人女性からも慕われる政商となった変貌ぶりを見せる。しかし、和助は、疑獄事件を契機に、陸軍の高官に出世し策謀家となった山縣有朋と対決し、命を断って、武士としての潔さを愚直に示して果てる。

〔講評〕

講談でも取り上げられている事件を、作者なりの着想で捉え直した点が評価される。作者が訴えたい意図は明確に伝わる。歌舞伎の一ジャンル「散切物」としての魅力こそなえ、「疑獄」という題材が現代的である。

小倉口の銃撃の音がベルサイユのワルツの音に変わったり、ワインを湯呑でくみかわす場面など、細部に面白さがあるのも、評価できる。

しかし、背景とした明治という時代、人物に対する掘り下げが浅く、作者がねらった、新時代及び官僚と対決する最後の武士の魂という対比が、十分に浮き上がって来てはいない。

台詞については、リズムがあるが、練り上げが不足し、方言の使い方、女性の言葉遣い等に粗雑な部分もある。書き物、新歌舞伎にふさわしい台詞をよく考えた上での工夫が望まれる。

外題は単刀直入で印象的だが、公演の題名としては考え直したい。

『陣中花在』

〔概要〕

会津戦争直前、江戸で官軍に敗れた若い武士が、会津街道に近い宿で官軍の武士と対峙し、

悲劇的な結末を迎えるまでを描く。

舞台は、会津街道から脇に入った温泉宿。ここに松前藩士・川田喜平治が、敗北した長岡藩の武士・高垣平右衛門、長岡藩の僧・持照とともに滞在している。長岡藩の残党を詮議する長州藩士・岡村兼蔵、河野左内がこの宿にやって来て、様々な思いを抱く敗者側の人たちと、官軍側の人間が向き合う。上野の彰義隊の残党と知れた喜平治は、捕らえられようとするが、岡村の情けを受け、恩讐を乗り越え武士を捨てて生きる思いに傾く。しかし、官軍の横暴さの前に、捨て切れぬ彼の誇りはついに自死の道を選ばせる。

〔講評〕

現代人も共感できる旧時代の正義と新時代の価値観のぶつかり合いを描いており、作者が、いずれの価値を選ぶのかを問いかける姿勢が、明確に伝わる。作者が訴えたい戦の偽善性も、台詞や、切腹という行為で巧みに表現している。

物語は無理なく運ばれつつ、最後までどう展開するのかが予断を許さず、後半になるに従って盛り上がり、予想外の結末になるのが評価できる。

しかし、前半が冗長である。また、十分訴えてくる聞かせ台詞がないともいえる。そのため主人公の自死という結末に至る筋に、説得力があるとはいえず、唐突感がある。広く共感を得られるかは疑問である。主人公と対峙する岡村という人物を岡本綺堂の「佐々木高綱」になぞらえ、会津戦争を舞台にした作品が書けるかもしれない。

なお、重要な場面で人物の行動に影を落とす、敵味方を超えた「母」なるものの書かれ方が弱い。女性の存在がもっと書かれるべきである。歌舞伎の基本的な魅力の一つは、「色気」にあることに留意すべきである。外題にも工夫が必要である。

『春来甘辛田楽味』

〔概要〕

売れっ子の芸者が、純朴な呉服屋の手代と出会い、虚勢を捨てて自分の納得する思いに従って生きようと決意するまでを描く。

芸者の雪治は、欲の深い姉の画策もあって、鼻唄の大口屋幸右衛門に身請けされることになっている。しかし、金の無心をしてくる情夫の半兵衛とも関係が続けている。そうした状況下、雪治にほのかな思いを寄せる大口屋の手代・庄助は、大口屋の女房から雪治の行状を探索するように命じられる。人柄の良い幸右衛門の庇護を受けるのが雪治の幸せだと信じる庄助は、半兵衛と別れるよう雪治を諭すが、受け入れられない。庄助は、半兵衛の存在を報告できず、主人を欺くつらさから店を辞める。庄助の純朴な心に惹かれていた雪治は、このことを知り、故郷に帰る庄助を待ち受け、嫁にしてほしいと頼み、二人は将来を誓い合う。

〔講評〕

筋立て、運びともにこなれていて、後味の良さが残る。作者がねらいとした「わかりやすく、あまり深刻ではなく、感情移入でき」、「自分の意志で行動した結果、幸せの道を見つけるヒロイン」を描くことは、一定程度成功しているといえるだろう。

しかし、登場人物が物事を深刻に考えない反面、訳知りの大口屋の女房など、人物が都合よく出来過ぎているか、定型的に終わっている感もある。これといった特徴もなく、魅力にとぼしいともいえる。たとえば、雪治が半兵衛と別れない理由が「芸者の意地」と簡単に述べられ、後であっさり現実な男に乗り換えるなど、筋の運びにも強引なところがある。

芝居の約束についても、廻り舞台や幕の使い方に、次の場面との日にちの隔たりを踏まえるような基本を押さえることが望まれる。

種々の名作をよく知っていると思われるが、表面的によいところ取りをした感がある。作者の実力からして、言葉を吟味し、骨のある物を書いてもらいたい。台詞を洗い上げ、花柳界の空気がもう少し濃くなると、リアリティが増すであろう。外題は少し堅い感があり、一考を要する。

『かざしの姫君』

〔概要〕

菊を愛する姫は、菊の精である貴公子と恋をするが、姫に片思いする武官はそのことを知ると姫の丹精する菊畑の菊を切って、菊の精の命を奪ってしまう。姫は、自らの命を断つ。

〔講評〕

着想と素材が面白い。菊の精と姫君のラブロマンスは、歌舞伎の本質に通じるものである。物言わぬ弟・次郎も、点景として効果的である。武官と闘った貴公子が傷を負い、その傷口から白菊がこぼれ落ちるシーンは、ファンタジックで幻想を増す。

しかし、人間と菊の精が結ばれるための「枷」（障害）のないのが難点である。弟の次郎が口をきけないことに必然性が感じられず、両親の存在感が希薄。姫の自死も唐突で、物語が共感を起こさせるものとなっていない。作者のねらう「妖艶で美しい悲劇」というものがよく伝わってこない。

細部にも問題があり、王朝物のようなものであるが、小判が出てきたりする。台詞に、他の言葉と統一がとれていない現代的すぎるものが頻出する。